

## 第6回

# ウスバサイシン

薬学事務課 嘱託技術員 鈴木 達彦

ウスバサイシンはウマノスズクサ科の多年生草本植物であり、近縁のフタバアオイやカンアオイとともに観賞用にされる。写真は開花期のものであるが、とてもシンプルな形態をしている。通常は葉を2枚つけ、暗紫色の目立たない花を地上すれすれに咲かせる。花はがくだけ持つ単花被花で、これが筒（がく筒）になってツボ状の花を形作る。普通の植物は種子をなるべく遠くに運ぶため、少しでも高い位置に花をつけようとするものであるが、ウスバサイシンの仲間にはそんな心配はいらない。種子に蟻が好む附属体（エライオソーム）をつけているので、労せず蟻が種子を運んでくれるのである。薬用としては地下部の根茎、および根を用い、細辛とされる。その名の通り、フタバアオイなどと比べて根は細く、味は辛い。

日本薬局方では細辛の基原植物としてウスバサイシンとケイリンサイシンをあげているが、日本に自生するものでもツボ状の花の形状や花粉などから近似する種が地域差をもって分布していることが、東京理科大学、故中村輝子先生の研究により明らかになっており、近年の遺伝子レベルの研究でもこれらの結果は支持されている。

細辛には、精油（エッセンシャルオイル）成分としてメチルオイゲノール、サフロールなど、辛味成分としてペリトリン等が含まれる。ツンとした香りがあり、口に含むと舌の感覚が麻痺したようになる。歯科領域ではオイゲノール（歯医者の特有のにおいとなる）を局所麻酔や鎮痛の目的で用いており、構造が

近いメチルオイゲノールにも類似の作用がある。その他、細辛には鎮咳去痰作用などが知られている。



漢方におい

ては細辛の作用について「九竅を利す」や「水道を利す」といったような独特な表現がなされる。「九竅」とは体にある9つの穴のことで、つまり、目(2)、鼻(2)、口(1)、耳(2)、陰部(2)といった外に向かって開いている場所である。東洋思想では大自然と人体とが交流して調和することが重要であるので、外界との接点である九竅が正しく機能しているかどうかはとても大きな問題である。一方、「水道を利す」とは、停滞した体液を排除する意味である。漢方では「経絡」などが血液の他、気や水といったものを運ぶ通路として考えられ、細辛は特に水の通り道の滞りを開く作用がある。細辛が配合される麻黄附子細辛湯は、初期の感冒に用いられる漢方処方である。やや尿量が減ってむくみを伴っていたり、軽い鼻水、鼻づまりがある時などが適用である。また、小青竜湯は近年花粉症に用いられており、どちらの処方も九竅と水の通り道を開く細辛が大きな役割を果たしている。

その他、面白い使い方としては、細辛を粉末にしてツボには貼る方法がある。口内炎には臍か臍の少し下に貼っておく。体の中心線には口と下腹部をつないでいる任脈という経絡が通っていて、細辛が任脈の通りを良くすることで口内の腫れが引く、という経絡論に基づいた治療法である。この療法はオイゲノールを含む丁子でも代用できる。うまくツボを選べば関節痛や神経痛、痛風の痛みなどにも応用でき、奇効を示すことがある。